

その後、五日ほどは平和だった。そもそも臨也が忙しかつたらしく、電話が一度、メールが二度来たが、逢うことはなかったからだ。

失神するまで抱かれた翌日は起きあがることもできなくて、学校も休む羽目になった。けれど臨也は悪びれた様子もなく、笑って言った。

——これで俺のだったって少しは理解できたよね？

さんざん鳴かされて、何度も僕は臨也さんのです、と言わされたことを思いだし、赤面する。

すぎる快楽は辛いほどで、懇願したのにやめてはもらえなかった。そんなことの後だったので、連絡が少ないのかえって幸いだった。逢っても、どんな顔をして良いのかわからない。今だって、もはやおぼろげな記憶しかないのに恥ずかしくて仕方がない。ほかに、ずいぶん恥ずかしい台詞を言わされた。

(忘れよう、早く忘れた方がよい)

自分に言い聞かせつつ、池袋の街を歩く。入学当初は何かもが新鮮だったが、さすがに放課後、池袋の街を歩くのは『いつものこと』になった。日常そのものの行動。それはそれで、嫌いな時間ではなかった。非日常はもちろん好きだけれど、それは日常あってこそだ。

そうして適当に歩いていると、彼の姿を見つけた。

……見つけなければよかった、と次の瞬間に思った。

どうもいつの間にか、自分は雑踏の中でも臨也を捜す癖を身につけてしまったらしい。

池袋の人混みの中、彼はその片隅にいた。いつものように、黒を主体とした服装。唇は笑みの形に曲げられ、優しげなまなざしで帝人の知らない女子高生と会話をしている。女子高生は後ろ姿で、表情は見えない。制服姿なので女子高生だとわかった。女子の制服には詳しくないが、池袋の街ではちらほらと見かけるものだったから、きつと近隣の高校なのだろう。

すぐに目を背ければいいのに、つい、目が彼を追ってしまふ。だから、その瞬間をはっきりと確認できてしまった。

いかにも自然な動作で臨也が身を屈める。女子高生が腕を伸ばし、臨也に抱きつく。そうして、まるで映画かドラマのワンシーンのように様になる動きで臨也と女子高生が唇を重ねたらしいことがわかった。その瞬間を見届けて、ようやく帝人は目を背ける。そしてことさらに急ぎ足でその場から離れた。

(今、……キス、してた、よね)

あれは決して誤解でも見間違いでもなかった。

(これって浮気現場に遭遇って言うのかな)

けれど、自分たちは恋人ではなく、恋人ごっこにすぎない。それを考えれば、浮気とは言わないのかもしれない。たまたま今回目の当たりにしてしまったが、恋人ごっこを始めてからも、帝人が知らないだけで、臨也は女性たちとキスしたり、夜を重ねたりしているのかもしれない。